

中国人学習者の日本語発音における自己モニター行動

早稲田大学日本語教育研究科 趙靚

第1章 序論

第1章では、本研究の背景、目的および本論文の構成について記述する。

中国の高等教育機関における日本語教育の現状を見ると、語彙や文法の積み上げ方式で学習していくのが一般的な教育の形態である。実際に筆者が体験してきた中国の高等教育における日本語教育では、総合的科目¹のほか、聴解、会話、文法、翻訳、日本事情などに関する授業が代表的な科目で、発音に特化した科目を持つ機関は極めて少なかった。中国人学習者（以下、CS）の日本語発音における清濁の混同や、特殊拍の習得上の問題点などが報告され、CSを対象とする日本語音声教育の必要性が示されている（劉 2008）。筆者の大学の卒業論文の調査では、CSが自分の産出した音声を聞き、修正を行う行動が観察されたことから、CSが自発的に自分自身の発音をモニターすることに関心を持ち始めた。先行研究では「自己モニター」行動は言語習得の過程で行われるメタ認知的活動であることがわかってきた。

来日してから、個人チューターやボランティアとして日本語の教育実践に参加して、ほかの学習者の自己モニター行動を観察する機会があった。自分の発音を聞いたあと、迷い始め、自分で発音を調整したりして、どの発音がよいか確認できずに結局曖昧な発音でごまかした学習者がいた。また、自分の発音に不自然なところがあることに気付いたが、なかなか修正できるまでに達していない学習者もいた。このような学習者に接する中で、「自己モニター学習法」の効果を知っていても、学習者が実際に日本語を使ってコミュニケーションをするときに現れた「方法」ではない「自己モニター行動」には、どのような要素が関わっているか、それはどのような意識によって現れたのかという一連の疑問が浮かんできた。そのあとも常に学習者の「自己モニター行動」に意識を向けて学習者の日本語学習をサポートしていたが、それらの疑問に対する答えが未だに見つかっておらず、先行研究でも明らかになっていないため、本研究で明らかにしたい。

以上の背景を踏まえ、本研究の目的は、CSの日本語発音における自己モニター行動（以

¹中国の大学日本語教育では、「精読」という科目があり、語彙、文法、会話、読解というさまざまな学習項目を総合的に指導する科目である。

下、自己モニター行動)の有無、その自己モニターのプロセス、また、その自己モニターに影響する要因を明らかにすることである。

第2章 先行研究

第2章では、自己モニター、日本語の発音における自己モニター、中国における日本語の音声教育についての先行研究を概観し、本研究の位置づけを述べる。そして、本研究で扱う「自己モニター行動」という用語を定義する。

自己モニターを定義するものとして、Oxford (1990) は学習ストラテジーを直接ストラテジーと間接ストラテジーに分け、「自己モニター」は「間接ストラテジー」に属する「メタ認知ストラテジー」の下位分類であるとして居る。小河原 (1998) では発音学習の際に「自己モニター型」のストラテジーが発音学習に効果的な影響を与えていることが明らかになった。また、「発音学習における自己モニター」を「学習者が妥当な発音基準を意識的に持って発音し、発音した自分自身の発音が基準どおりに発音できているかどうか自分で聴覚的に判断し、自己修正すること」と定義している。

前述のとおり、これまでの自己モニター研究と日本語発音における自己モニター研究は、方法として捉えられたものが多く、その方法の効果を中心に研究されてきたことがわかる。しかし、学習者が実際に日本語でコミュニケーションするときを経験する自己モニターの諸要素はまだ明らかになっていない。また、学習者の実際のコミュニケーションにおける自己モニターに影響を与えている要因を明らかにする研究は管見の及ぶ限りない。

以上を踏まえ、本研究の位置づけについて述べる。中国の日本語教育における教室指導では、音声を中心とした指導がほとんど行われていないのが現状で、多くのCSが教室指導に求めている「もっと自然な発音で話したい」という学習ニーズが満たされないままだと言える。このような現状に対応するために、先行研究では学習者の自律学習を促していく学習方法などが提唱されてきた。その中で自己モニター型の学習法は学習者の学習意欲や学習向上意識につながり、その効率性についても検証されつつある。しかし、自己モニターを具体的な方法として捉えるだけでは、その「方法」に適さない学習者にとってどこまで役に立てるのか疑問が持たれる。本研究では、自己モニターを「方法」というより、「行動」という捉え方をしたい。その行動のプロセスを構成している要素を明らかにすることで、学習者が日本語を話すときに行う自己モニターの実態が把握でき、その中で特徴となっているもの、不足しているものが見えてくるといえる。また、その行動に影響を与えた

要因がわかれば、教育現場で学習者の自己モニター行動をどのようにサポートしていくかという示唆が得られると予想される。

最後に、本研究で扱う「自己モニター行動」という言葉の定義を提示する。本研究で扱う自己モニター行動とは、学習方法としての自己モニターではなく、学習者が実際に日本語でコミュニケーションをするときに現れる行動としての自己モニターである。自己モニター行動に関わっている要素²や要因³は、自己モニター学習方法と重複する点もあるが、行動としての自己モニターの独特の特徴もあると筆者は考えているからである。

第3章 調査概要と分析方法

第3章では、本研究の目的を明らかにするために行った調査の概要と分析方法を述べる。

調査目的は、CSの日本語発音における自己モニター行動の有無、その行動のプロセスと、その行動に影響を与えた要因を明らかにすることである。それらを明らかにするために、2つの調査を行った。

まず、調査Iについて述べる。調査Iは「日本語の発音」をテーマにした活動である。調査Iの目的は以下の3点である。(1) 調査協力者に日本語を話す経験を共有してもらう (2) 活動経験時のメタ認知活動をインタビューで聞く (3) 活動を通して「発音の自己モニター」に刺激を与える。

調査Iの協力者はCS4名、中国人日本語話者1名、日本語母語話者1名、合計6名である。中国人日本語話者1名と日本語母語話者1名には、活動の進行役として参加してもらった。CS4名の基本情報は下記の表のとおりである。

学習者(仮名)	性別	年齢	出身	日本語レベル	日本滞在歴
ミン	23歳	男性	中国浙江省	初級後半	1年2ヶ月
タツ	23歳	男性	中国上海市	中級	1年2ヶ月
リア	23歳	女性	中国上海市	上級	8ヶ月
シズ	23歳	女性	中国上海市	超級	8ヶ月

調査Iでは、「日本語の発音」というテーマでグループディスカッションを行い、調査協力者の日本語発音における経験や感想を語ってもらった。活動が終わった後に、CS4名にフィードバック用紙に記入してもらった。

²要素とは、自己モニター行動を構成させる要素を意味する。

³要因とは、自己モニター行動に影響を与える要因を意味する。

次に、調査Ⅱについて述べる。調査Ⅱは個別インタビューである。調査目的はCSの自己モニター行動の有無、その行動のプロセスと、その行動に影響を与えた要因を明らかにすることである。調査協力者は調査ⅠのCS4名である。

調査内容は自己モニター行動に影響を与える学習経験、学習方法、学習習慣などの要因である。調査Ⅱでは、調査協力者4名を対象に半構造化インタビューを行った。調査で用いる質問項目は大きく四項目に分けられ、(1) 個人情報、(2) 日本語学習経験、(3) 日本語発音学習経験、(4) 調査Ⅰの活動経験となっている。

最後に、本研究の分析方法について述べる。本研究では、佐藤(2008)の質的データ分析法を参考に、以下の手順に従って分析を進めた。分析の手順は以下のとおりである。

(1) 分析観点を定める (2) CS4名の文字化資料を分析観点に基づき分類する (3) 分類した語りの概要を作成し、概念化する (4) 抽出した概念をもとの文脈に立ち返って検討する (5) 各CSの発音における自己モニターを記述する (6) 各CSの発音における自己モニターのプロセスを図式化する。

第4章 分析結果

第4章ではCS4名のインタビュー調査の結果および分析について記述する。

CSの発音における自己モニター行動の有無に関して、CS4名共通して自己モニター行動をしていることがわかった。そして、その自己モニター行動は、(1) ソフトウェアの使用により (2) 自ら日本語を話すときに (3) 日本人に聞き返されたときに (4) 他者の発音を聞いたときに現れる自己モニター行動があることが明らかになった。

CSの発音における自己モニター行動のプロセスに関して、CS4名の自己モニター行動から、基準、気付き、判断、修正、調整という要素が自己モニター行動のプロセスに関与していることが明らかになった。

CSの発音における自己モニター行動に影響を与えている要因に関して、CS4名の自己モニター行動から、学習意欲、音声記号の提示、音声知識の不足、学習環境、相手の日本語能力、発音を間違えることに対する不安、母語話者の発音に対する意識、母語話者評価の不足というさまざまな要因が見られた。そして、日本語使用場面・頻度、発音に対する意識、母語・母方言の影響という要因は4名に共通して見られた。

第5章 考察と結論

第5章では、本研究の分析結果を総合的に考察する。そして、本研究の結果を述べ、研究により得られた知見をどのように日本語教育に活かすか示唆を行う。最後に、今後の課題について記述する。

本研究は、自己モニターを行動の視点から捉え、また、自己モニター行動を話し手の立場と聞き手の立場の両方から考察した。学習者は話し手だけでなく、実際のコミュニケーションにおいては聞き手でもある。学習者が自分の発音、あるいは、他者の発音から、気付きを得て、発音を判断し、自分の発音の基準を構築し、自分の発音を調整、修正していくまでの自己モニター行動のプロセスを経過し、最終的に自分の発音の向上のためになるという点から、話し手と聞き手の両方から自己モニター行動を捉えることができる理由と考えられる。

そして、自己モニター行動のプロセスに関して、CS4 名に見られた自己モニター行動のプロセスには、基準、気付き、判断、修正、調整が関与していることが明らかになった。それぞれの要素にはさまざまな中身が含まれ、要素同士も影響し合っていることがわかった。その中で、基準、判断と修正は先行研究の結果を裏付けるものである。そして、気付きと調整との2つの要素が自己モニター行動に関与する基準、判断、修正とは違う要素として、本研究を通して初めて明らかになった。また、それらの要素で構成されるプロセスは部分的に行動に現れることもあることが明らかになった。行動としての自己モニターは最初から最後まで行われるのではなく、学習者の実践ごとにプロセスが変わっていくことがわかる。本研究を通して、学習者の日本語発音における自己モニター行動を動的に捉える必要性を示唆することができた。

最後に、自己モニター行動に影響を与えている要因に関して、母語・母方言の影響、日本語使用場面、発音に対する意識という3つの要因が共通して挙げられた。共通して見られた要因から、方言差が自己モニター行動に影響していることについて言及することができた。そして、日本語使用場面の違いで、学習者の発音における自己モニター行動の現れ方も違ってくるのが明らかになった。さらに、学習者4名の発音に対する意識から、「意味さえ伝わればいい」と思っているのは学習者でなく、むしろ母語話者のほうであるというコメントや、「標準的な発音を学習していきながら、現在の自分の発音も保ちたい」という興味深いコメントが得られた。これらの要因により、学習者の日本語発音における自己モニター行動の現れ方が影響され、自己モニター行動のプロセスもつねに変化していくこ

とになる。

以上を踏まえ日本語教育への示唆を述べる。

(1) 本研究では母語・母方言という要因が学習者の発音における自己モニター行動に影響を与えていることが明らかになった。学習早期段階に学習者の母語・母方言を意識してサポートすることによって、初級の段階から学習者の発音に対する興味を促すことができる。また、方言話者としての有利な点を知ってもらうことで、学習者の日本語発音学習に対する学習意欲を高めることができるであろう。そして、母語・母方言を取り入れた教室活動を通して、学習者の興味関心を促すことで、発音に対する意識化も促されることが期待される。

(2) 学習者の日本語発音における自己モニター行動では、基準、気付き、判断、修正、調整という要素が関与していることが明らかになった。学習者の経験から、基準を教えてくれる相手がないことや、発音を調整しても意味が通じず、最後に文字で意味を伝えたことなどが理由となって、学習者が調整、修正までいけないことがわかった。発音の自己モニター行動のプロセスを知ることで、「修正」に近づいていくための工夫を検討していくことができる。日本語教育現場では、学習者が自らの基準で発音を調整する行動がよく見られる。教師の立場からは、学習者の発音における調整という行動が修正に至るまでの1つの段階として認識する必要がある。また、学習者の調整という行動を否定的に捉えず、それを肯定的に見守る意識が大事である。そして、学習者としても、直接修正までたどりつけなくても、調整という試行錯誤をすることで、忍耐強く学習を継続していく姿勢も重要である。

(3) 本研究では、自己モニター行動を話し手と聞き手の視点から捉えた。コミュニケーションにおける発話交換が行われていく中で、話し手だけでなく、聞き手としての立場も考慮することが不可欠である。日本語の発音学習においても、話し手と聞き手との両方の立場を取り入れていく必要がある。日本語教育現場においては、口頭発表などの教室活動では、意味理解を中心とする聴解練習が多く行われている。しかし、意味理解以外に、学習者の発音における自己モニター行動を促すための教室活動にも、聞き手の立場を取り入れる必要がある。例えば、口頭発表のときに、学習者に他者の発表内容の理解だけでなく、他者の発音の面にも注意を向けて聞くようにアドバイスすることができる。他者の発音を意識的に聞き、自分が発音していなくても、自分の発音と他者の発音を比較することで、新たな気付きが生まれるだろうと考える。また、教室活動において教師が学習者の発

音に関する助言をすることで、学習者は教室外のコミュニケーションにおいても、他者の発音をメタ的に聞きかけとなり得るのではないかと考える。

今後の課題は以下の2点である。

(1) 学習者が自己モニター行動で感じている困難点を明らかにした上で、それらの対応策を探る。

(2) 本研究でわかった学習者の自己モニター行動に影響を与えている「母語・母方言」という要因を詳しく見る。

引用文献

小河原義朗 (1998) 「日本語学習における発音学習ストラテジーの有効性の検討」『言語科学論集』東北大学 第2号, pp. 1-12.

佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社

劉佳琦 (2008) 「中国語母語話者における日本語の有声・無声破裂音の混同—母方言干渉を考慮した上で—」『日本語教育と音声』くろしお出版 pp. 141-162.

Oxford, R. L. (1990) *Language learning strategies: What every teacher should know.* New York: Newbury House.